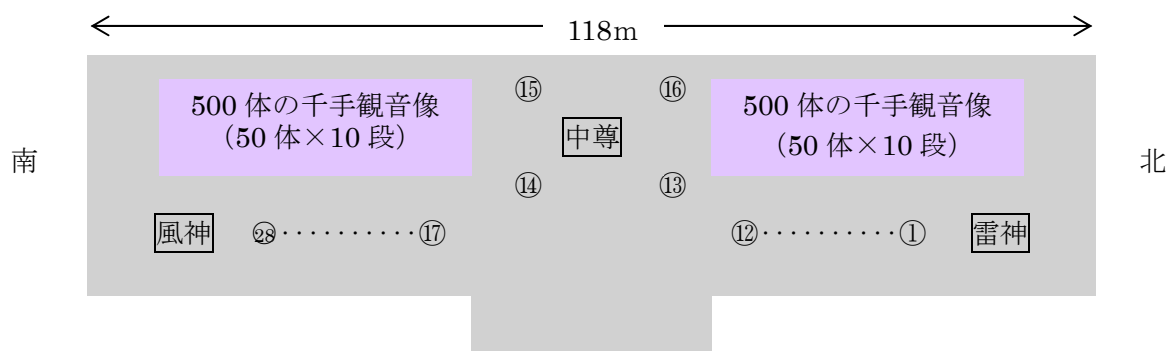


東山七条にある**三十三間堂**の正式名称は**蓮華王院**（本堂）、長寛二年（1164）の後白河法皇の勅願により平清盛が巨費を投じて造営寄進した観音堂で、南北に長細い（約 118m）建物です。当時、法皇は頭痛に悩まされ、熊野詣と市中の因幡堂参籠を重ねたところ、根治をするためには^{えこう}回向（読経を行い死者の冥福を祈る）が必要と告げられ、ために観音堂を祈願したわけです。

堂は柱と柱の間が33あるため俗に「三十三間堂」と呼ばれ、本尊は千手観音菩薩坐像〔国宝〕、^{たんけい}湛慶一派の作（建長六年・1254）とされます。この時代の仏師・彫刻家としては運慶・快慶がつとに有名ですが、湛慶は運慶の長男でありまして、運慶没後は一門を率っていました。

堂を真上から見たのが下図ですが、突き出た部分のある細長い舞台のような建物です。中央の国宝観音菩薩坐像（中尊）を四天王像（図⑬～⑯、東方天・増長天・広目天・多聞天）が守り、その左右に^{ひな}雛壇のように千手観音立像が並んでいます。前面の左右両端に雷神・風神像、間には守護神像（図①～⑫および⑰～⑳、四天王と合わせて**二十八部衆**と呼ぶ）が配置されています。二十八部衆の中には金色孔雀王・金毘羅王・^{かるら}迦楼羅王・阿修羅王・帝釈天王・密遮金剛王など、その名前を聞くことの多い仏像がたくさんあります。このように、天竺・唐・日本の神々を集め中尊を守護するわけで、意気込みと申しますか、発願は並大抵のものではない証拠です。



堂内は荘厳な雰囲気には満ちておりますが、何と言いましても圧倒的な数の仏像に驚きますね。さすがに、後白河法皇と清盛という両巨頭が関与しただけのことはあります。さらに、後年には最高の仏師が魂を吹き込んだわけですから、まさに財と技術の粋を集めたものだと言えます。

ついでに申し上げれば、二十八部衆は手にいろいろなもの（剣・宝珠・蓮・弓・経典など）を持っておられますが、これらは、あらゆる厄災から衆生を守るための象徴を意味しております。中には横笛を奏でている像——迦楼羅王像——もあります。そのためでしょうか、堂内の気配は静寂であるにもかかわらず、音の世界すら感じさせます。

さて建長元年（1249）三月二十三日のことですが、この建物は火災に遇い、観音立像 156 体と二十八部衆を残して灰塵に帰してしまっただけです。湛慶が中尊を造仏したのは、この後です。

文永三年（1266）には再建の落慶法要が営まれました。その後は応仁文明の乱（1467～77）、天文十三年（1544）の大地震（→仏像 5,000 体が転倒損壊）などもあって、さらに、豊臣秀吉が修改築を施した（築地塀は新築、「太閤塀」と呼ばれる）わけではありますが、現存する建物は今から 740 年前の、再建された文永時代のものということです。

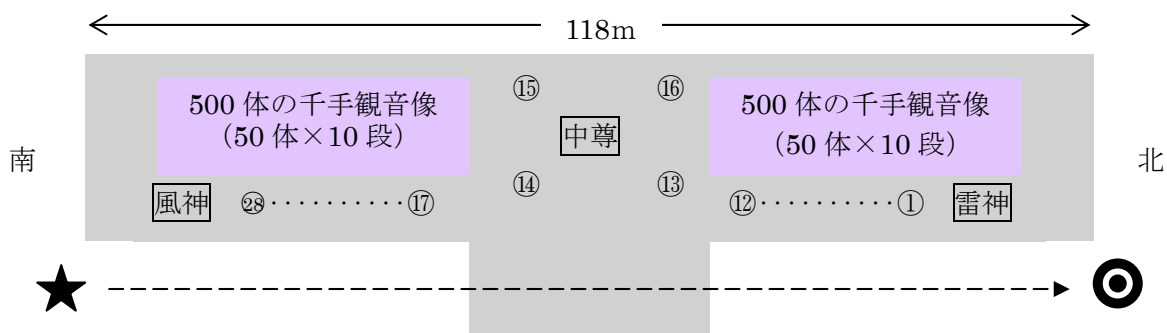
◎ 通し矢 ◎

三十三間堂を有名にしたものに「通し矢」という儀式がありました。皆さんも弓術の大会などを見られたことがあると思いますが、遠くの的を目掛けて矢を射るものですね。あれと似たものが三十三間堂で催されました。始まりは天正年間（1573～91）と伝わり、信長・秀吉の時代です。

『一代要記』という書に、熊野権現別当の梅坊なぎのぼうという者が弓術を好み、八坂の的場に通っていたが、或る日の帰りに御堂で休憩した折りに、ふと思いついて軒下で矢を射たと記されます。但し、熱狂的とも呼べるブームが起きるのは江戸時代に入ってからのことです。

下図をご覧ください。★印が射る人で、◎が的ですが、堂内ではなく軒下で行なうものであり、矢を射る者は地面に立っております。かくて射的の際、あまりに斜め上へ向けて矢を射ますと、ひさし庇（高さ4.5m）に当たる惧れがあります。さらに、突き出た舞台（高縁）も障害となります。結局のところは、かなりの強さで、ほぼ直線的に矢を飛ばすことが射士に求められるわけです。このように、33本の柱の間の距離を射通すことから「通し矢」という名で呼ばれました。

尚、後年には軒下ではなく堂の前の広場（境内）で行ったようで、『三十三間堂通し矢図屏風』に描かれた絵を見ましても、そのことは一目瞭然、はっきりと分かります。



江戸時代は諸藩から弓の名人が集まり、一定時間内に何本の矢を的中できるかを競いました。この時間が当初どれくらいであったのかわかりませんが、後年には一日（夕刻6時頃から始め、翌日の夕刻6時頃まで）ということに定められていました。とてつもない長丁場ですし、照明の乏しい時代にもかかわらず夜間から始めるわけですから、その体力は勿論のこと、射的の精度を保つのも大変だったことでしょう。これはやはり、見世物・余興として催されたのではないかと推測され、それだけの人気を博した証拠でしょうか。尚、先述の『三十三間堂通し矢図屏風』を見る限り、松明や篝火は見当らず、全く日中の競技であり、見物人も多数描かれています。

当時の藩士は、戦のためではなく鍛錬として剣・槍・弓・馬の四つの腕を磨いていましたから、その成果を示す絶好の場として大変な人気を呼ぶことになりました。とはいえ、幕府公認の大会などではありません。幕府は過熱が元で諸藩の間に諍いが生まれまいかと心配したほどです。

諸藩においても表向きは幕府に右へ習えですが、藩士が活躍すれば国威発揚ならぬ藩威発揚になることは間違いなく、名誉なことでもあります。実際に徳川家康は、最高の成績を残した者に「天下一」の称号を名乗ることを許しており、さらに褒美も与えたわけですから、藩士はおろか、諸藩が競うようになったことも当然の成り行きでした。

◎ 記録更新ラッシュ ◎

約230年間に延べで823人の射士が競い、画期的な個人成績は下表の通りです。

最初の浅岡重政の記録はさほどでもないようですが、これは本人の技術的な問題ではなくて、時間をかけて息を整え、満を持して射るといような、いわゆる儀礼的な作法のためでしょう。おそらく、制限時間そのものも短かったのではないかと思います。

かくて、重政は徳川家康より「天下一」の称号を許されて、俸禄もウナギ上り、つまり大出世を果たしました。尾張徳川家の藩士という理由もあったのでしょうか。そのことも大いに影響し、それ以降も、名誉と出世のために挑戦する者が跡を絶たないという有り様となったわけですが、わけでも紀州と尾張の徳川家両藩による争奪戦の様相を呈したことは有名です。

慶長十一年 (1606)	浅岡重政 [尾張]	51 本	初の天下一
?	吉田大茂 [肥前]	3,333 本	
寛永年間 (1624~43)	杉山三右衛門 [尾張]	3,475 本	5,044 本まで更新
同 上	長屋六左衛門 [紀州]	4,313 本	
明暦二年 (1656)	吉見台右衛門 [紀州]	6,343 本	
寛文二年 (1662)	星野勘左衛門 [尾張] 20歳	6,666 本	後に記録更新
寛文八年 (1668)	葛西園右衛門 [紀州] 19歳	7,077 本	
寛文九年 (1669)	星野勘左衛門 [尾張] 27歳	8,000 本	再び天下一に
貞享三年 (1686)	和佐大八郎 [紀州] 27歳	8,133 本	史上最高記録
明治三十二年(1899)	若林素行	4,457 本	最後の記録

和佐大八郎の記録は以降も破られていない偉大なものですが、ここで記録を検証してみます。

24時間の制限時間内に総計 13,053 本の矢を射って、そのうちの 8,133 本を命中させたことが記録に残ります。途中休憩はあったようですから、仮に総時間の 20%を休憩・睡眠・食事などに充てたとすると、5.3秒に1本を射って、62.3%の確率で命中させたという計算になります。休憩時間などが仮定より短かったとしても、まさしく矢継ぎ早に射ったことは確かでしょう。もはや人間業とは思えず、本当に可能だろうかと思ってしまうそうです。

次に、史上2位の記録を持つ星野勘左衛門の場合ですが、寛文二年においては総計 10,125 本の矢を放ち、そのうちの 6,666 本を命中させた。これは 6.8秒に1本を射って、65.8%の確率で命中させた計算になる。同九年には総計 10,542 本の矢を放ち、そのうちの 8,000 本が的中した。これは 6.6秒に1本を射って、75.9%の確率で命中させたという計算になります。

驚くなかれ、彼の場合は本数でこそ和佐に劣るものの、的中確率ははるかに上回っています。和佐の記録は勿論ですけれども、星野の記録もまことに立派、天晴れだと言わざるを得ません。野球に譬えるなら、和佐は最多安打記録保持者、星野は最高打率記録保持者と言えましようか。尚、星野勘左衛門については、『柴田錬三郎選集6・剣鬼』に興味深く描かれています。

和佐の記録から2年後には元禄の世が始まりました。泰平の世が続いたためか、和佐の記録はついに凌駕されることはありませんでした。それにしても人の潜在能力とは驚くべきものです。武威を持つ守護神である四天王像も、観音堂の中で目を見張ったのではないのでしょうか。